

道端から学ぶ、人々の世界 地理学

九州北西端の平戸島の農村集落を歩くと、不思議な呪文が書かれた御札に出会うことがあります。道端をよく観察して歩かないと、いつの間にか見過ごすことも多く、家々からは少し離れた交差点の脇などに、高さ数十cmほどの木片が地面に挿し込まれています。

これらは一般に「辻札」（つじふだ）と呼ばれ、毎年の正月に、災いや疫病が外から集落の中に入ってこないように、地元の人々が「ここから先には絶対に入らせない」と考える数カ所の地点に立てられます。新しい道路の開通などの諸事情によって、立てられる場所が移動したり、数が増減したりすることもあります。このような特別な地点は、民俗学や地理学では「村境」（むらぎかい）と呼ばれ、実際に置かれるものは全国的に様々に異なります。良く知られたものとしては、近畿地方における稲藁製の綱（道路を跨いで張る）、関東地方や信州の道祖神（どうそじん）の石像などがあります。

平戸島の辻札の呪文は、多くの場合は神社の宮司によって書かれますが、寺院の僧侶やヤンボシ（山伏あるいは山法師）と呼ばれる修験者が携わる集落もあります。写真の根獅子（ねしこ）集落のように、長らくキリシタンであった人々も、このような辻札を自身の集落の村境に立ててきました。

ある一つの集落で、辻札が立てられた地点をすべて観察すれば、好ましくないものはどこから侵入してくるのか、守るべき集落の「内部」とはどこからどこまでを指すのかといった、地元の人々による考え方の一端を垣間見ることができます。

このような呪術的な辻札を、非科学的で学術的には取るに足らない存在であると、一蹴することは容易にも思えます。しかし、そこに住む人々が日々何を思い、何を信じ、どのような営みを続けてきたのか、少し専門的な言葉で言えば、人間の「生活世界」や「空間認知」のあり方を解明することも、地理学の重要なテーマの一つです。

今里悟之 教授



根獅子集落の辻札（長崎県平戸島）

モノから過去を見る：本日の発掘調査 考古学

ちょうど今、岐阜県関ヶ原町で発掘調査をしている。

考古学は、人間の活動痕跡から人類の過去を明らかにする学問である。例えば、土器、石器、人が残した穴から、当時の人の生活を復元する。土中の活動痕跡を掘り出し、図や写真等を使って記録を取り、それを元に過去を読み解いていく（事前に行政に法的申請が必要なので、無断に掘らないこと！）。

調査の話に戻ろう。きっとその方が考古学のイメージはつかみやすい。昨年、名古屋大学の考古学研究室は、初めてこの場所を発掘した。それ以前の調査で、古代の関所があったとされる場所だ。関所は、人を通すところでもあるが、お尋ね者を差し止める場所でもある。そのため、関所の周りには塀が築かれる。これを再確認すべく調査を始めた。結果、その塀の跡を見つけることができた。ということは、関所の役人等がいた建物が塀の内側にあるはずである。今回は同研究室の梶原義実先生主導でこの調査をしている。建物やモノが出てくれば、いつ、どのように使われていたのかもわかるだろう。類例を比較していけば、当時の政治のシステムや地域ごとの使われ方の違いなどもわかるかもしれない。こんな感じで、考古学は研究を進めていく。

こうした屋外調査や、大学での座学を通して、学生は考古学の専門知識を身に付けていく。中には公務員として考古学の専門職や、博物館関係に就職する人もいる。そのため、今日は学生に実際の現場を経験してもらい、貴重な時間でもある（教員が異様にはしゃいでいる気もするが・・・そこはご愛敬）。興味があれば、是非研究室を訪ねてきてみてください。以上、現場からでした。

中川朋美 准教授



調査風景（道具で土を削り、土の色を確認している。調査を進めると、この調査区からは、柱の穴の痕跡が見つかった。）

想像力を養う — 芸術と学問との交差点で — ドイツ語圏文化学

ドイツ語圏文化学は、文学作品や言語学はもちろんのこと、音楽や絵画、舞踊、映画など多様な芸術分野も対象としており、ドイツ、オーストリア、スイスといったドイツ語圏における文化現象について、領域横断的に学ぶことができます。例えば授業では、舞踊史から様々な身体文化に触れたり、ミュージカル『エリザベート』の台本をもとに、史実や複数の翻訳・上演を比較したり、詩の形式や内容を分析して歌曲を聞いてみたりとバラエティーに富んでいます。

学ぶ中で気付いたのは、想像力を養うことの大切さです。私自身、ミュージカルやお芝居、人形劇、ダンス、音楽ライブといった公演を積極的に鑑賞するようになりました。最近の習慣は、鑑賞後にパンフレットや書籍を読んで面白いと思った箇所を見つけてはひたすらチェックしていくことです。ひと段落ついて振り返ると、自分ってこういうことに意外と興味があるのかと気づいたり、研究とは無関係だと思っていたら突然アイデアがひらめいてきたりと、自分の想定を超える現象に遭遇することがあります。公演の原作を鑑賞すると、細部の描写も容易に想像しやすくなり、芸術作品を鑑賞する姿勢にも変化が表れてきました。

さらに文学作品やニュース記事、論文を声に出して読んでみると、今までは棒読みでしかドイツ語を読めなかったのが不思議と感情移入できたり、この単語を強調したいのだろうと思い自然に声に抑揚がつくようになってきたり、表情豊かなドイツ語が身につくような感覚もあります。これからも面白そうと思ったものにアプローチし続けていきたいです。

坂崎未依 博士前期課程2年

ドイツ語圏文化学のリテラボ



月刊 名大文学部 第141号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2024年9月10日発行